

M&A専門誌

Mergers & Acquisitions
Research Report

MARR マール

2007 May 5月号

発行人 高橋 豊
Yutaka Takahashi

編集長 川端 久雄
Hisao Kawabata

制作進行 加藤 順子
Junko Kato

表紙写真 十文字 美信
Bishin Jumonji

アート
ディレクション 石崎 路浩
Michihiro Ishizaki

デザイン 山田 陽一
Youichi Yamada

本文写真 福本 敏雄
Toshio Fukumoto

印刷 三松堂印刷株式会社

発行所：株式会社レコフ

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-1-1

麹町ダイヤモンドビル

TEL.03-3221-4942

2007年5月1日発行 通巻151号

雑誌18321-05

定価2,310円 本体2,200円

 RECOF

編集室から

BOOK 

『株式会社』

ジョン・ミクルスウェイト、エイドリアン・ウールドリッジ著
日置弘一郎・高尾義明監訳、鈴木泰雄訳
ランダムハウス講談社 2000円(本体)



会社とは何か。国家や家族と並んで、今や我々にとって一番身近な存在であるのに、実像はつかみにくい。本書は、近代的公司の150年の歴史をたどりながら、会社の役割、株主と経営者の関係など会社めぐる問題を考える上で欠かせない知識を提供してくれる。

近代的公司、即ち株式会社は19世紀のビクトリア女王時代の英国で発明された。自由な設立を認めた準則主義、法人格、共同出資、有限責任を特徴とする株式会社制度は米国や欧州大陸に瞬く間に広がった。米国が世界経済の中心に躍りでたのも会社という制度を上手に使ったからだ。鉄道建設や製鉄会社は会社の仕組みを利用した典型である。巨額の資金を集め、経営専門家の層を作り上げていった。広大な国土のインフラ整備や国をひとつにまとめ上げるうえで、会社が果たした貢献は計り知れない。米国では経済発展の原動力となる会社の本社を誘致しようと、各州が会社の設置基準引き下げ競争に走る。こうして株主よりも経営者に手厚いデラウェア州の会社法ができ上がったという。

社会主義者が夢みて果たせなかった方法で会社は貧しい人たちの生活を変えた。今では、ロシアや中国でも会社が花盛りである。さながら会社の数が国力のパロメータとなり、米国は550万社を誇る。しかし、個別の会社が生き残るのは決して楽でない。必死で改革に取り組むことになる。現在のコンセプトは、コアコンピュタンスへの特化である。多角化を目指す時代もあったが、今はリスク分散は投資家の仕事と考える機関投資家らの圧力で、経営者は事業範囲が適切かどうかを自問し、選択と集中をせざるをえなくなっている。

この会社の本質を巡っては古くから二つの会社観があった。会社は株主だけに責任を負うのか、社会集団に責任を負うのか。極論すれば、収益を稼ぎ出す道具か、公益に奉仕させる道具かの対立である。米英は前者で株主資本主義といわれるに対し、ドイツや日本は後者で利害関係者資本主義といわれる。英米では会社への規制強化、日独では競争原理採用で、最近ではどちらも接近しつつあるが、根底にある違いは根強く残っているという。

会社の所有と経営が分離し、株主資本主義の国では、株主が経営者をどうコントロールするかが重要な課題になる。コーポレートガバナンス論の誕生である。ストック・オプションをもたせれば、経営者が株主と同じ発想をすると考えたが、これもエンロン事件で、経営者に乱用された。今では経営者の権力から小口投資家を保護するため、監督官庁の役割が高まっている。内部統制の強化の動きである。しかし、株主が望む形で経営者の権力を抑え込むにはいたっていない。逆に経営者の力はますます高まるばかりである。

最近日本でもMBOによる非上場化が増えているが、LBOの本質も経営者に所有者と同じように考えさせる仕組みであると指摘しているのも面白い。

わずか250頁余りの小著だが、中味は凝縮している。会社をめぐって生起する現象を正しく捉える目を養うのに役立つ。著者らは英エコノミスト誌の米国担当記者。(青)

編集後記

編集を担当してちょうど100号目の印刷仕上がり日と誕生日が重なった帰り道、近所の店で静かに祝杯をあげた。記念のごほうびは木下順二訳の「シェークスピア全8巻」と決めていた。以前、古本屋で見つけたものだ。装丁も気に入っていた。しかし、すでに誰かに買われていて、手に入らず。まあ、直ぐ読む訳でもない。また気長に探そう、と気分を切り替える。念のため、出版社に問い合わせたが、やはり絶版。

幸い、病氣や怪我はなかったが、ピンチがなかった訳ではない。何とか乗り切ってここまでこられたのも、周囲の無言の励まし、読者や寄稿者の支援、時代の風のおかげだろう。いずれ来る最終ゴールに向けて次なる一里塚を心に秘める。「もう若くないのだから高からず、遠からずだよ。かといって易からずだ」。(開)

本誌の記事およびデータの著作権は原則として株式会社レコフに帰属します。いかなる目的であれ当社に無断で本誌記事の複製、引用、転載等を行うことを禁じます。また、本誌記事の情報は、当社が信頼できると考える各方面から取得しておりますが、その内容の正確性、完全性が保証されているものではありません。当社は本誌記事に起因して被った損害については、その内容如何にかかわらず一切の責任を負いません。乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。マール室 (03-3221-4942) までご連絡ください。